
スマッシュブラザーズ 光と闇と伝説の英雄 キノコ王国編

赤い小説家

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スマッシュブラザーズ 光と闇と伝説の英雄 キノコ王国編

【Nコード】

N3061W

【作者名】

赤い小説家

【あらすじ】

スマッシュブラザーズの冒険物語。ある日、普通に生活していた主人公、マリオは、ある人との出会いをきっかけに伝説の英雄を目指す冒険に出る。

冒険の途中に待ち受けるのはさまざまな試練、果たして、マリオは試練を乗り越え伝説の英雄になることができるのか？

「さあ、伝説の英雄を目指す冒険へ、Let's and go!」

プロローグ 物語の始まり（前書き）

皆さん、こんにちは！赤い小説家です！頑張って小説のプロローグを書きました！よろしければ読んで見てくださいね！

プロローグ 物語の始まり

ここは、神により創られた世界、フィールドアース。ここには、神により創られた人類、フィギュアが暮らしている。

彼らは、神により創られ、それぞれに記憶や身分、そして、特徴を与えられた善の心を持つライトフィギュアと、自然と創られた悪の心を持つダークフィギュアがあり、それぞれが自由に暮らしていた。

しかし、ダークフィギュアの中には、やがてフィールドアースを我が物にしようとする者が現れる可能性があるため、神は対策を考ええた。

だが、いくらライトフィギュアを創る神も、その者に対抗できるライトフィギュアを創ることは難しかった。

そこで、神は自らが考えた試練を乗り越えた者にあるものを渡すことを考えた。

それは、伝説の英雄の心である。

ジリリリリ…………。

リン！

この物語は、

「ふああ…。もう朝か…。」

一人の男とその仲間たちの

シャツ！

「……！いい天気だなあ！」

伝説の英雄にまつわる物語である。

「さて！今日も頑張るぞ！」

彼の名はマリオ。後に伝説の英雄を目指す者である。

プロローグ 物語の始まり（後書き）

皆さん、今回の小説のプロローグどうでしたか？よろしければ、感想をお願いします！

第1話 キノコ王国のスーパースター マリオ（前書き）

マリオの冒険小説の第1幕！いよいよ始まります！楽しんでもらえるかどうかわかりませんが、よろしければ見てください！

第1話 キノコ王国のスーパースター マリオ

ここは自然が豊かな不思議な国。キノコ王国。この国は顔がキノコのような形をしているキノコ族がたくさん暮らしているキノコタウンを中心に、人間の姫が治めている。

そして、ここはそのキノコタウンから少し離れた場所にあるひとつの家。ここには、ある二人の人間の兄弟が暮らしていた。

「ルイージー！朝だよー！」

と言いながら、朝食を作っているのは、兄のマリオ。Mの文字が書かれた赤い帽子と赤い服、青いオーバーオールに団子鼻の下に生えている立派な髭が特徴的だ。ついでに言くと、少し太っているのも特徴的だ。彼は見たところ普通の人間に見えるが、優れた運動能力や、強い正義感と勇気の持ち主である。そして、彼はそれらを活かし、キノコ王国を初め、さまざまな国の平和を救ったキノコ王国のスーパースターとなった。

「うーん…。おはよう、にいさん…。」

と言いながら、眠そうに二階から下りてきたのは、弟のルイージ。青いオーバーオールに団子鼻にその下に生えている髭とマリオに似た格好や特徴を持っているが、マリオと違うところはLの文字が書かれた緑の帽子と緑の服を身に着けている。他に違うところは、マリオより体型が細く、身長が高いところだ。彼は、マリオに負けないう運動能力を持っているが、勇気がなく、臆病なせいか、マリオより有名ではない。

マリオとルイージは、マリオブラザーズというコンビ名で、一般の人々を初め、王族にもその名が知られている世界的な有名人だ。

「眠そうだね。もうすぐご飯ができるから、顔を洗って待ってて。」

「うん…。わかった…。」

そして、ルイージは顔を洗いに洗面台へ行った。

マリオが朝食を作り終えるまで少し時間がかかるため、マリオの

家を解説しよう。マリオの家は、キノコタウン側にある入り口から入ると、居間がある。その左隣のドアの先には、風呂とトイレと洗面台が別々にある。そして、入り口から入ってまっすぐに廊下を進むとキッチンがある。ちなみに、そのキッチンの左隣にはさまざまな道具がある道具部屋になっている。そして、その廊下の途中には……
「ルイージー。ご飯できたよー。」

おっと、マリオが朝食を作り終えた。解説の続きはまた次の機会に。

そして、マリオは二人分のトーストと目玉焼きを居間のテーブルに運び、運び終わると椅子に座った。ルイージは、すでに椅子に座っていた。そして、二人は朝食を食べた。

「ルイージ、今日はピーチ城に行くよ。ピーチ姫がケーキを焼いて待ってるぞ。」

「えっ！？ピーチ姫が！？うん、わかった！じゃ、早くご飯食べて行こうよ！」

ピーチ城に行く。姫に会う。姫の焼いたケーキを食べるという三つの喜びが重なって、先ほどの眠気が嘘のように消えて元気になったルイージ。それを見て微笑むマリオ。

ピーチ姫とは、このキノコ王国を治める、美しく民思いの心優しい人間の姫。金髪の長髪とピンクのドレスが印象的である。マリオブラザーズとは幼馴染みでもあり、よく頼りにしている存在である。そして、二人は朝食を食べ、歯磨きと顔洗いをし、ピーチ城へ出かけた。

マリオの家からピーチ城があるキノコタウンまでの距離は、歩いて五分しかかからないほどである。その途中には穏やかな草原しかなく、特に何もない。

マリオブラザーズは五分もたたずにキノコタウンを通り、ピーチ

城の前の大きな門にたどり着いた。

マリオブラザーズが急いでいるため、キノコタウンについては解説できないが、ピーチ城のことなら少しは解説できる。キノコタウンにある大きな塀と門、その先には、大きな城。ピーチ城がある。ピーチ城の周囲はきれいに整備されている芝生が生えており、入り口付近には元気に咲いている花々がある長方形の花壇と、大きな噴水がある。ちなみに、ピーチ城の入り口の上の壁には、顔のパーツがないピーチ姫が祈っている絵が飾ってある。ピーチ城の中については別の機会にしよう。

「こんにちはー！マリオブラザーズですー遊びに来ましたー！」
マリオが大きな門の前で挨拶をすると、慌てた老人の声が聞こえた。

「おおっ！！マリオ殿！！今、大変なことが起こったのじゃ！！すぐに入ってください！！」

マリオブラザーズは、「何があつたんだろう…？」と思いつつも、ゆっくりと開いた門を通った。すると、その先でキノコ族のお爺さんが片方がキノコのような形をした細い杖を持ちながら、顔にたくさん冷汗をたらしながら慌てていた。

「何を慌てているんですか？キノじい。」

マリオは、キノじいと言う慌てている老人に声をかけた。

キノじいは、ピーチ姫のそばに仕えるキノコ族のお爺さんで、頭に茶色い水玉模様があり、白く大きな髭をしている。いつも紫色のタキシードのような服を着て、杖に寄りかかって生活しているが、一大事になると杖に寄りかからず普通に慌てたりしている。今はまさにそんな状態だ。

「マリオ殿！姫が…、姫がさらわれてしまったのじゃ！！！」

「！！！？ええ！！！？さ…さらわれた！！？」

キノじいの言葉にマリオは驚いた後、真剣な目つきに変わった。
「今朝、わしの元にこんな手紙が届いて…。そして、それを少し読んだ後、姫様の部屋に行ったときには…。」

と、キノじいは一通の手紙をマリオに差し出し、ピーチ姫がさらわれたときの様子を泣きながら話した。マリオはその手紙を受け取り、早速読んだ。

「『ワガハイの宿敵マリオ ピーチ姫は昨夜の内に頂いた。返して欲しければおまえ一人でワガハイの城に來い。 かつこいい大魔王クツパ』…くそっ！またクツパの仕業か！！」

マリオは手紙を読み終えると、その手紙を手で握り締めながら怒った。

クツパとはキノコ王国を支配しようとしているカメ族の大魔王で、鬼のような顔、鋭い爪、巨大な体、とげが生えた甲羅が特徴である。彼はピーチ姫のことがものすごく大好きで、いつも無理やりにでもさらおうとする。しかし、そのたびにマリオがピーチ姫を助け、失敗に終わっている。その回数は、数え切れないほどである。

「マリオ殿！！お願いですじゃ！！ピーチ姫を助けてください！！」
キノじいは、泣きながらマリオにピーチ姫の救出を頼んだ。それに対しマリオは、

「わかりました！僕に任せてください！」

一度うなずいてからこう引き受けた。

マリオは、困っている人を見ると放っておけない優しい心の持ち主である。このぐらいの頼みは快く引き受けてくれる。

「それじゃあ、早速行つて來ます！キノじい、安心してください。ピーチ姫は必ず僕が助けます！」

「ありがとうございます！マリオ殿！」

マリオの言葉に希望が見えたかのように喜ぶキノじい。

「ルイーダ。悪いけど、家に帰つて留守番をしてて。」

「うん、わかつたよ！兄さん、氣をつけてね！」

「それじゃあ、行つて來ます！」

「いつてらっしゃーい！」

「マリオ殿ー！！頼みましたぞー！！」

こうして、マリオはルイーダとキノじいに見送られながら、ピー

チ姫を助けるためにクツパ城へ向かうのであった。しかし、これはマリオの長い冒険の始まりに過ぎない。彼は、そのことをまだ知らない。

「どんな困難があっても、困っている人たちを必ず助け見せる！それが、僕の正義だから！」

「ところで…。ルイージ殿？」

「はい？なんですか？キノじい。」

すっかり泣き止んだキノじいが改まって、ルイージにある疑問をぶつけた。

「……そなたはいつからそこにいたのですかな？」

「……………え？」

二人しかいないピーチ城の庭に小さく寂しい風が吹いた。

第1話 キノコ王国のスーパースター マリオ（後書き）

キャラクター紹介

No.1

マリオ

登場作品

スーパーマリオブラザーズなど

キノコ王国のスーパースターで、この物語の主人公。

見た目は普通の人間だが、すごい能力の持ち主で、その能力を活かして何度もキノコ王国の平和を救った世界的な有名人である。

冒険家の他にも、配管工や医者、スポーツ選手など様々な仕事を経験している。

仲間思いの性格のため、仲間からの信頼が厚い。

今回は、ある人との出会いをきっかけに伝説の英雄を目指す冒険に出る。

いかがでしたか？マリオはこの後どうなってしまふのでしょうか？次回もお楽しみに！

できれば、感想をお聞かせください！

第2話 クッパ城を目指せ！（前書き）

スマブラ冒険小説第2話！楽しんでいただければ光栄です！

第2話 クッパ城を目指せ！

キノコタウンからキノコ平野を通り、クッパ城へ向かうマリオ。キノコ平野はキノコタウンとクッパ城の間にある広い平野。ほとんどが草原だが、道端にキノコが時々生えていることがある。

「早くピーチ姫を助けなきゃ！」

「そう簡単に助けられるかな？」

急ぐマリオの前に敵が現れた。現れたのは、茶色く、キノコのような形をしている生物。数は三体。

「！クリボー！」

マリオは敵の名前を言った。

クリボーとは、元はキノコ族だったが、かつて、クッパがキノコ族を襲撃したときにキノコ族を裏切り、現在はクッパが率いるクッパ軍団に所属している。数は何体もいる。

「そう、俺たちはクッパ軍団の見習い三人組！」

「俺たちはここで、マリオを倒す！」

「そして、クッパ様の護衛兵になる！」

三体のクリボーは自分たちの決め台詞を言ったが…。

「…あの…。僕、急いでいるから！それじゃ！」

急いでいたあまり、マリオはクリボーたちが台詞を言い終えた後、クッパ城へ向かった。クリボーたちはずっとこけた。しかし…、

「こらっ！！無視するな！！」

一体のクリボーがマリオを呼び止めた。すると、マリオはクリボーたちの方に振り向き、一言言った。

「無視するなって言われても…。その台詞何度も聞かされてるし。それに、僕は本当に急いでいるんだ！だから、君たちに構ってる暇はないんだ！じゃ！」

と言って、マリオは再びクッパ城へ行こうとした。クリボーたちはしばらくその場で固まっていたが、これでクリボーたちが黙って

いるわけがない。

「…だから…、無視するなー!!」

怒ったクリボーたちが、同時にマリオに体当たりをした。

(…しつこいなあ。…しょうがない!)

襲い掛かるクリボーたちを見たマリオは、相手をすることにした。

「はっ!!」

ビシッ!

マリオは、一体目のクリボーに左パンチを与えた。

「やっ!!」

バキッ!!

続いて、二体目のクリボーに右パンチ。

「とりゃあ!!」

ドコッ!!

そして、三体目のクリボーに左キックをお見舞いした。

三体のクリボーは、マリオのよくある攻撃で気絶してしまった。

「ふう…。さて、行くか!」

と、マリオが気を改まってクッパ城へ向かおうとすると…、

「待て待てー!!よくぞ僕の部下を倒したな!!」

マリオの目の前に、一体の敵が現れた。見てみると、緑色の甲羅を着たカメだ。

「…ノコノコ…。」

マリオは、ちょっぴり呆れたように敵の名前を言った。

ノコノコとは、クッパの手下のカメ族。クリボーと同じく、数はたくさんいる。

「そう、僕はさっき貴様が倒した三体のクリボーのリーダー!!」

「僕はここでマリオを倒す。そしてクッパの護衛兵となる?」

マリオは、ノコノコが言おうとした言葉を予想して、呆れながら言った。ノコノコはずっこけた。

「お前!!僕の決め台詞を取るな!!」

「知らないよ!君の決め台詞が何かって!」

「それに、クツパじゃない！！クツパ様だ！！」

「そんなことどうでもいいよ！」

二人：ではなく、一人と一体の短い言い争いが終わると、ノコノコは戦闘体勢をとった。

「まあいい！マリオ！この一発で、くたばってしまえ！」

そう言うのと、ノコノコは甲羅の中に潜り、回転しながらマリオに向けて体当たりをした。

「よし！そこまで言うなら相手になってやる！」

マリオはそう言うのと、ある技を使うような構えをとった。左足を前に右足を後ろに構えて力を入れ、左手を握って後ろに、右手を丸い物を持つようにして前に構えた。

マリオは、右手に精神を集中した。すると、右手から火の玉が現れた！そして、左手を前に、火の玉を持った右手を後ろに動かし、

「ファイアボール！！」

そう言ったとたん、左手を後ろに引き、右手の火の玉、ファイアボールをノコノコに向けて発射した！

ゴウ！！

「ぐあー！！」

ノコノコはファイアボールに当たり、小さな炎に巻き込まれ、気絶した。

「…さてと…。」

マリオが今度こそとクツパ城へ向かおうとすると…。

「待て待て待てー！！！！今度は俺たちが相手だー！！！！」

今度は、クリボー五体とノコノコ六体の軍団が現れた。

マリオはそれを見て思いつきりずっこけた。

「俺たちは…！」

「もういいよ！！相手になるから！！」

軍団は全員で決め台詞を言おうとすると、マリオはそれを止めるかのように、すぐに顔を上げて突っ込んだ。

「それじゃあ！早速いくよ！」

マリオは気を取り直し、戦う気を出しながらそう言うと、一体の
ノコノコを踏みつけた。

「うわっ！」

すると、そのノコノコは甲羅の中に入った。

「今だ！ いっけー！！」

マリオはその甲羅を掴み、ボウリングのピンのように並んでいる
敵たちに向けて投げた！

バッコーン！！！！

「あ~~~~れ~~~~！！！！」

「やった！！ ストライク！！」

宙を舞った敵を見て、マリオはガッツポーズをとった。

「さて、そろそろ行くか！」

そして、今度こそマリオは、クッパ城へ向かった。

「……もう敵は来ないよな……」

一方、クッパはクッパ城でマリオと自分の部下の様子を見ていた。
クッパ城については次の話で解説しよう。今は彼と囚われたピー
チ姫の様子を見てみよう。

「クッパ様……！ 申し訳ございません……！ マリオは相変わらず強い
です……！」

「ばか者……！！ 何をやっているのだ……！！ お前たちは一ヶ月便所掃
除なのだ……！！」

「そ、そんな……！！！」

クッパは、マリオにやられた部下をモニター越しで叱り、モニタ
ーの電源を切った。

「全く！ どいつもこいつも！ 何でワガハイの部下はあんなに早くマ
リオに負けるのだ！？ ワガハイを見習って欲しいものなのだ！」

クッパは独り言を言つとピーチ姫のところへ向かった。

ピーチ姫は今、地下牢に閉じ込められている。

「ピーチちゃん。早くワガハイと一緒にこの城で暮らすのだ。」

「嫌よ！私をピーチ城に帰らせて！」

クツパと一緒に暮らすように言っているとピーチ姫はそれを断る。よくあることだ。

「ガハハハハ！そうはいかんだ！そこでぼろぼろになったマリオが、ワガハイに引きずられてくるのを待ってる！そのときに絶対にお前はワガハイに惚れるからな！」

クツパは自信ありげにそう言った。だが、ピーチ姫は、

「そんなことは絶対ないわ！ぼろぼろになるのはあなたよ！」

ピーチ姫はマリオを信じているのか、クツパの言葉を否定する。

「果たしてどうか？じゃ、三十分後また来るのだ。それまでおとなしくするのだぞ。ガハハハハ……！」

そう言ってクツパは地下牢を後にした。

独りになったピーチ姫は、マリオが助けに来ることを神に祈った。
「神様……。どうか、マリオが無事でいられますように見守ってください……。」

そのころ、キノコ王国とは別の大陸では、一人の男が馬に乗りながら、キノコタウンとは比べ物にはならない町の門の前にいた。そして、男はピーチ城より遥かに大きい城を見上げた。その男は、緑色の服を着ており、背中に剣と盾をを背負っている。

「姫が、私に一体何の用なのだろうか？」

そして、男は馬から降り、

「エポナ、お前はここに残って待っているんだぞ。」

と、馬に話し、町へ続く門を通った。

第2話 クッパ城を目指せ！（後書き）

キャラクター紹介

No.2

ピーチ姫

登場作品

スーパーマリオブラザーズなど

キノコ王国の美しいお姫様。

マリオブラザーズとは幼なじみで、とても仲がいい。

よくクッパにさらわれるが、そのたびにマリオが助けてくれる。

世界の平和を目指しているので、色々な国や地方とはできる限り交流するようにしている。

今回もクッパにさらわれ、マリオに助けられる…ということになるはずが…？

どうでしたか？よろしければ感想をお願いします！

第3話 クッパ城の仕掛け（前書き）

皆さん長くなりましたが、ようやくできました！前は納得がいかなかったので、訂正しました！

第3話 クツパ城の仕掛け

「…ついにたどり着いた…。」

マリオは、迫り来るクツパの部下達に邪魔をされつつも、ついにクツパ城にたどり着いた。

クツパ城の外見は、一言で言えば石で作られた大きな城で、その城の周りには深い谷とその下にある深い溶岩が囲んでいる。クツパ城への道は、その谷をまたぐ石の橋一本しかない。ちなみに、クツパ城の屋上には、等身大のクツパの石像がある。

「待っててください！ピーチ姫！必ず助け出します！」

マリオはそう言った後、気を引き締めつつも走りながら橋を渡り、正面の大きな扉からクツパ城の中に入った。

（クツパめ、覚悟しろ！この前ピーチ姫をさらいかけてたときみたいにコテンパンにするからな！）

と、強く考えながら入り口から特に何もない広い玄関をまっすぐ進み、その先の扉を開けたマリオが見たのは、

「…まずは一本道か…。」

人が普通に歩けるほどの細さの一本道とその一本道の先にある扉。その途中には、一本道で立っている人の足元を邪魔するかのように回っている四個の火の玉が繋がった棒、ファイアバーが五本、そして、その一本道の真下は暗い底だった。

「この一本道の途中にファイアバーを設置するだけなんて、単純すぎるな？」

マリオはそう言った後、なんとこの状況が怖くないのか、落ちれば暗い底の一本道を普通に歩いた。途中で迫ってくるファイアバーもジャンプで軽々とよけ、簡単に一本道の先の扉にたどり着いた。

「あれ？簡単に通れたぞ？いつもだったらこんなことなかったのに……。」

マリオはそう言いながら次の扉を開けた。どうやら前までクッパ城に行ったときは苦戦していたようだ。

次の部屋でマリオが見たのは、

「これは……！」

たくさんのリフトが一直線に並んで浮かぶ部屋だった。もちろん、そのリフトを越えた先には次の部屋への扉があり、リフトの真下は暗い底である。また、この部屋のリフトにはそのまま動かないものや、入り口から見て前後に動くもの、上下に動くものもある。

「……これまた単純だな……。どういうことだ？」

と、言った後、マリオはリフトへジャンプした。動くリフトもタイミングを見計らってジャンプし、そして、たくさんあったリフトを簡単に渡り、あつという間に次の扉にたどりついた。

「……？？？また簡単に通れたぞ？」

「あつっ……！今度は溶岩か……！」

マリオが入った次の部屋は、部屋中に溶岩であふれていた。そのためこの部屋はとても暑く、二分いるのがやっとのぐらいの暑さだ。溶岩の中には、ジャンプをしないと届かないくらいの距離を置いて一直線に並んで突き出ている足場があるが、人が立てるぐらいの面積しかない。また、それらの足場の中には溶岩に沈んだり出たりする足場もあれば、溶岩の中を前後に移動する足場もある。それらの向こうには当たり前のように扉がある。ただ、今までと違うのは比べ物にならないほどの大きい扉だということだ。

「あの扉の向こうにきつとクッパがいるな…。何度もピーチ姫を助けるためにクッパ城へ来たけど、毎回大きな扉の先にはクッパがいたんだ。今回も同じパターンに違いないな。」

マリオがその扉を見てそう確信し、そして、

「…今度こそ何かあるよな…。」

そう言った後、困難な仕掛けが出ることを予想…というより期待しながら溶岩から突き出ている足場へジャンプした。動く足場も難なく渡り、マリオは結局、簡単に次の部屋への扉についた。

「…期待してた僕がバカみたい…。」

と、小さく独り言を言いながら、マリオは額の汗を腕でかき、クッパ城に入ったときの気迫が消えたまま次の扉を開けた。

マリオが少しやる気がなくなりつつも入った次の部屋は、今までとの部屋とは比べもにならないほど広く、目の前に長いレッドカーペットがある。その先には、

「…クッパ…。」

クッパが玉座に座っていた。その姿はとても偉そうだ。マリオがやる気を失いつつクッパの名前を言った後、クッパはその状態で、「ガハハハハ！よく来たなマリオ！ここまで来れたことを褒めてやるのだ！」

と、言った。それに対しマリオは、

「……………」

ジト目でクッパを黙ってみていた。クッパはそのことを知らずに玉座から降りてマリオに近づきながら、

「フム！それでこそワガハイの宿命のライバルにふさわしいのだ！」

と、言った。

「…クッパ、ひとつ質問していいか？」

突然、マリオはそう言うと、クッパが、

「？何なのだ？」

と言ったのを確認して質問をした。

「今回のクッパ城の仕掛け、ずいぶん単純すぎないか？」

ここでクッパからギクツと言う声が小さく出たが、マリオはそのことを知らずに質問を続ける。

「いつもだつたら、城の中には敵がうじゃうじゃいて、大砲や爆弾が四方八方から降ってきて、下から溶岩が迫って来るっていう位すごい仕掛けがあつたのに。」

マリオの少し心配がこもった質問にクッパは冷や汗をかきつつ少し震えながら答えた。

「いや、そ、それは……、えっと……、……！そうそう！！小手調べと言つやつだ！！お前の力が劣つてないかウォーミングアップ風の仕掛けで待ち構えていたんだ！！！」

「……ふーん……。」

クッパの答えにマリオはジト目で腕を組み半信半疑でクッパを見ながらそう言った。しかし、クッパは頭の中で、

（本当は、仕掛けを作る資金がなかったただけだ……。マリオに負けっぱなしの日々が重なって、それがアルバイト部隊にも響いて失敗ばかりしているからだ……。おまけに部員は全員キノコ平野でマリオに負けちゃったし……。）

と、本当の答えを考えていた。クッパも苦勞人……いや、苦勞亀だ。余談だが、そう考えた後マリオに気づかれないように小さい声で「いかんいかん……。」

と、言っていた。

そして、

「まあ、答えはわかったからそれはそれでいいとして……。クッパ！ピーチ姫を返してもらおうか！」

マリオは気を改めてクッパに本題を話した。

「ガハハハ！！それはワガハイに勝つてこの鍵を手に入れてからなのだ！！！」

同じく、期を改めたクッパは、そう言うってからマリオに牢屋の鍵をみせた。もちろん、この鍵があればピーチ姫を助けることができる。

「よし！勝負だ！」

「ガハハハハ！！勝つのはワガハイなのだ！！！」

ピーチ姫の運命を決めるバトルが、今、始まる！勝つのは、ピーチ姫を助けるためにここまで来たマリオか！それとも、打倒マリオとピーチ姫との同居を目標とするクッパか！

（それにしても…、なんか違和感があるな…。何でだ？…いや、考えてても仕方ない。今は戦いに集中だ！）

一方、ここはキノコ王国とは違う別の地方。この地方のある国のとある城の謁見の間で、一人の男性が一人の女性と話していた。男性は緑の服を着て、剣と盾を装備しており、女性は、見るからに王女のような格好をして玉座に座っていた。どうやら、本当に王女のようなのだ。

そして、男性は王女に話しかけた。

「姫様、私に何か御用でしょうか？」

「はい。突然で申し訳ございませんが、お使いをお願いします。」

「お使い？一体どこへ？」

「キノコ王国へ行つて欲しいのです。」

第3話 クッパ城の仕掛け（後書き）

キャラクター紹介

No.3

クッパ

登場作品

スーパーマリオブラザーズなど

カメ族の大王。

ピーチ姫とキノコ王国を我が物にしようとしているが、それはいつもマリオに邪魔される。

その事もあって、マリオとは互いが認める宿命のライバルという関係となり、いつかマリオを倒そうと思っている。

悪者として有名だが、時には紳士的な一面を見せることもあるので、マリオたちからはあまり嫌われていない。

部下の面倒見は結構悪い。

皆さん、どうでしたか？これまではちょっと忙しいことがあったので次話投稿が遅れました！次回も頑張ります！

第4話 対決！マリオVSクッパ（前書き）

今回はいつもより早く書けました！ついにマリオとクッパが対決！
また楽しんでいただければ光栄です！

第4話 対決！マリオVSクッパ

ここは、とある地方のとある国。この城の謁見の間で二人の人間が話していた。一人は戦士、一人は王女だ。

王女は男に話した。

「あなたにはキノコ王国のレインボータウンへ行き、私が注文したものをここへ持ってきてほしいのです。」

「レインボータウンへ？…あの、こう言うのも何なのですが、なぜわざわざ私にお使いを頼むのですか？お使い、それも平和なキノコ王国へなら城の兵士に任せても大丈夫なのでは？」

男がそう言うと、王女は少し心配した表情で話した。

「よく聞いてください…。世界は今、悪しき闇に閉ざされてしまおうとしているそうです…。」

「な！まさか、そのような夢を見たのですか！？」

驚きながら質問をする男に対し、

「…はい…。」

王女はまだ心配した表情でその質問に答えた。

「しかも、最初に闇に閉ざされるのは…キノコ王国なのだそうです…。」

「！」

「！」

男は驚き、その場にはしばらく沈黙が続いた…。

一方、ここはキノコ王国のクッパ城の奥の部屋。ここでは、マリオとクッパのバトルが始まろうとしていた。

「さあ、マリオ！かかってくるのだ！」

「そうか…。」

クッパの挑発に対し、マリオは戦いの体勢に入り、

「だったら、遠慮なくこっちから仕掛けるぞ！」

マリオが先手を取るため、ダッシュでクッパに接近した。

「来たな！クッパクロー！！」

クッパはそれに対し、その場で立ちながら右手の爪で、迫るマリオを引っ掻いた。

ブン！！

しかし、クッパは引っ掻いた感覚を感じなかった。

「何！！？」

クッパが見たのはクッパの引っ掻ける範囲のぎりぎり外で立ち止まったマリオだった。

「まんまと騙されたね、クッパ！」

マリオはそう言うとともにクッパに接近し、攻撃を仕掛けた！

「やあ！」

ズンッ！！

「たあ！」

ズンッ！！

「とりやあ！！！」

ドコッ！！

マリオはクッパの腹に、左パンチ、右パンチ、左キックの順番で攻撃した。

「ぐおおおっ！！！！」

クッパは思わず腹を抱えた。

「えっ……？」

マリオはそんなクッパを見て疑問を感じた。

（いつもだったらこんな攻撃、くらってもピンピンしていたのに……。）

「な、なかなかやるな……！さすがワガハイのライバル……！」

クッパの声に気づいたマリオは、疑問を考えることをやめ、バトルに集中した。

「だが、今度はどうかな……！！？」

クッパはそう言うと、大きいジャンプでマリオから離れ、大きく口で空気を吸い込み始めた。

「！クッパプレスか！」

マリオは次にどんな技が出るかがわかった。

クッパプレスとは、クッパが大きく口で空気を吸い込んだ後、そのまま標的に大きな灼熱の炎を出すクッパの必殺技だ。

「クッパプレス！！！」

マリオはクッパの言葉に合わせ、避ける準備をした。そして、

「グロア！！！」

クッパはそう叫びながらマリオに向かって……！

「……え？」

サッカーボールのような炎を出した。しかも、その炎はまっすぐマリオに向かってくるが、スピードはサッカーのループシュートのようなだった。マリオはそれをさっと避け炎は壁に当たると消えてしまった。

「……………」

この状況を見たマリオは、少し心配してすぐにクッパに話した。

「クッパ、今日のお前変だぞ？どうかしたのか？」

クッパから、

「ギクギクッ！！！」

というマリオには聞こえていないほどの声が出た。クッパは慌てて、

「そ……そんなことないのだ！！次は出るのだ！！だから、もうちょつと待つて欲しいのだ！！！」

もう一度クッパプレスを出そうとした。

「クッパプレス！！！」

しかし、出たのはまたしてもサッカーボールのような炎。

「……クッパ………本当にどうしたんだ？」

マリオは本気でクッパを心配した。

「又又又又………」

クッパはここから連続でクッパプレスを出した。

「クッパプレス……!!」

しかし、今度はバレーボールのような大きさの炎。

「クッパプレス……!!」

今度はテニスボール。

「クッパプレスウウ……!!」

そして、最終的にはスーパースポールのような大きさになってしまった。スピードもだんだん遅くなり、マリオはその炎を受けてもダメージは受けなくなった。

「クッパ……、さっきの仕掛けといいこの状況といい……。」「

マリオは頭を下に向け、腕を強く握り締めた後、

「お前は僕をバカにしてるのか……!!」

クッパに顔を向け、切れながらつつこんだ。そろそろ我慢の限界のようだ。

「う……!!」

クッパはそれを見て、思わず声を出し、だんだん体から冷や汗が出てきたが、クッパはその状態で何とか声を出した。

「そ、そんなことはない!!今度こそ!!クッパプレス……!!」

クッパがそう言って放ったクッパプレスは、まるでビー玉のような形が三輪車で移動しているようなスピードで空中を進んでいるみたいになってしまった。それを見たマリオは、

「もういい!!こっちから攻撃する!!」

とうとう我慢できなくなり、ボールを持つように構えた右手をクッパに向けて、精神を右手に集中させた。そう、これはマリオの必殺技!

「ファイアボール……!!」

マリオの怒りのこもった声とともにファイアボールが発射された!ファイアボールは隼のような速さでクッパのビー玉のようなクッパプレスを飲み込み、クッパの方へ一直線に向かった。

「ちょ、ちょっと待っ……!!」

クッパは何か言おうとしたが、その前にファイアボールがクッパにぶつかった！

ゴオオー！！

「ぎゃああああ……！！！」

クッパはファイアボールによって炎に包まれ、黒焦げになり倒れた。

今回のバトルは、マリオの勝利だ！

「さあクッパ！鍵を渡せ！」

マリオはクッパに近づき、そう言いながら手を差し出した。

「くっそ……」

クッパは悔しそうだ。また宿命のライバル、マリオに負けてしまったのだ。当然の反応だろう。

プルルルル、プルルルル……

（？何だ？）

「！」

突然、クッパから音がした。マリオは音がするクッパを見て疑問に思ったが、クッパはすぐに携帯電話を取り出したので納得した。さっきの音は携帯電話だ。

ピッ

「……………」

クッパは携帯電話のボタンを押すと誰かと通話し始めた。ちよつと長い上に小さい声で話していて何を話しているのか聞こえないため、マリオはクッパの携帯電話を見ていた。

（クッパの携帯電話古いなあ。厚みがある上にアンテナがある……あれ？）

ここでもマリオは疑問に思った。

（そつえば、クッパは確か最新型の携帯電話のはず……。前に、僕

にそう自慢してたのに。」

そう思った後、マリオは小さい声だが、クッパからはっきりと、
「了解です！」

と、言う声が聞こえた。マリオはそのことにも疑問を感じた。

（「了解です。」？何が？それに、見栄っ張りのクッパが誰に敬語
なんか使うんだ？）

そして、電話を切ったクッパはマリオに笑顔で話した。

「いやゝ、負けたのだ！相変わらずお前は強いのだ！」

「！？なんだ？急に…。」

「まあいいではないか！約束は約束なのだ！これあげるのだ！」

「え、…ああ…。」

突然笑顔になり、元気になったクッパを怪しみつつも、マリオは
クッパが差し出した鍵を手に入れた。

「あ、そうそう！ピーチ姫は地下牢にいるからな！」

「あ、ああ。」

（どうしたんだ？クッパのやつ、いつもだったら「マリオ！もう一
度勝負なのだ」って言って絶対に負けを認めないのに…。やっぱり、
今日のクッパは変だな…。）

マリオはそう思いながら、今のマリオから見て右の地下へ降りる
階段へ行った。その後、クッパはグタツと倒れた。黒い光に包まれ
ながら…。

「ピーチ姫！助けに来ましたよ！」

マリオは地下牢へ急いで向かった。

「あれ？…ピーチ姫？」

しかし、どの牢屋の中をくまなく探しても、ピーチ姫はいなかつ
た。

（これは一体…？…！まさか！）

何か感じたマリオは、クッパにピーチ姫の居場所を聞くために、怒りながらクッパがいる部屋へ急いで向かった。

「クッパ！ピーチ姫はどこに……。：：！」

クッパを見ようとしたマリオが見たのは、黒焦げになったクリボ―だった。そのそばには、先ほどマリオが見た厚みのあるアンテナつきの携帯電話が落ちていた。

「ま、まさか……。さっき倒したクッパは……。こいつだったのか！？」

第4話 対決！マリオVSクッパ（後書き）

キャラクター紹介

No.4

ルイージ

登場作品

スーパーマリオブラザーズなど

マリオの弟。

マリオと同じくすごい能力の持ち主だが、臆病な性格のためマリオよりも有名ではない。

影が薄いため、人に気づかれるのに時間がかかることも……。だが、そんな自分を大事に思っている兄のマリオが大好き。オバケが大の苦手。

決着かと思いきやまさかの展開が！って皆さんはもうわかっていましたか？次回はどうなるのでしょうか！楽しみにしていただけると光栄です！

第5話 突然の悲劇（前書き）

倒したクツパはなんと偽者！ピーチ姫は！？クツパは！？
第5話が始まります！

第5話 突然の悲劇

ここは、とある地方のとある城下町の入り口前。ここで、緑の服を身につけ、剣と盾を装備した男が馬の隣で真剣な表情を考えていた。

（…キノコ王国が…闇に閉ざされる…。）

そうこの男は、先ほどまで城で王女と話していた男と同一人物だ。男がそう思った後、王女と話したことを思い出してみた。

これは、その男の回想。男が王女に話しかける。

「…なるほど…。私がキノコ王国へお使いに向かうのは、いざというときのことを考えてのことなのですネ。」

「そうです…。ですから、もし、あなたがキノコ王国にいるときにキノコ王国が闇に包まれそうになったら、キノコ王国を助けてください…。」

「…わかりました…。では早速、私はキノコ王国へ向かいます。」

「お氣をつけて…。」

男は王女に一礼し、その場を去ろうとした。

「…あ！」

「！？どうしました！？」

突然、王女が何かに気づき、少し大きな声をあげた。男はそれに気づき王女に何があったのかを聞くと、

「…お使いの内容を、お伝えするのを忘れてました…。」

「…あ…、そういえばそうでしたね…。」

王女は少し恥ずかしながらも気づいたことを話した。男は納得した後、こう思った。

（私もすっかり忘れてた…。大事なことなのに…。）

そして、王女はお使いの内容を言った。

「お使いは、レインボータウンを治める王女から注文したあるものをもらい、私の元へ届けてください。私の名前を言えば、あなたに渡してくれます。」

「え？あるものとは？」

王女の言葉に疑問を持った男はすぐに問いかける。それに対し王女は、

「それは…、お使いが終わった後の秘密です。」

と、顔は見せられないが、笑顔で答えた。

「…はあ…。わかりました。」

男は少し納得のいかないまま、お使いの内容を理解した。

回想は終わり、今へ戻る。

男は回想を終えた後、早速馬に乗る。

「行くぞ！エポナ！」

「ヒヒーン！」

男は、エポナと呼ばれた馬とともにキノコ王国行きの船がある港へと向かった。

それと同じころ、王女は男と話した場所で、彼の無事を祈っていた。そのとき彼女が想像したのは、馬に乗りながら草原を進む、緑の垂れ下がったとんがり帽子をかぶった金髪で短髪の二枚目の男…。そう、今出発した男のことだ。

「どうかご無事で…。リンク…。」

「ま、まさか…！さっき倒したクツパは…、こいつだったのか！？」
一方、こちらはキノコ王国のクツパ城内。マリオは今の状況に驚きを隠せなかった。

「クツパを倒したと思ったら…。そのクツパがクリボーだったなんて…。でも、よく考えてみたら、この状況は納得するな。」

マリオは先ほどの戦いを思い出してみた。そこには、慌てたときに口癖の「ワガハイ」や「ゝのだ」を言わなかったクツパ。ただのパンチとキックで苦しそうに腹を抱えていたクツパ。いつも迫力のあるクツパブレスを出せなかったクツパなどが出てきた。

「じゃあ、ピーチ姫は！？本物のクツパは！？」

マリオは先ほどの戦いを思い出し終えた後、ピーチ姫とクツパの行方を探そうとした。そのとき…、

「ガーハツハツハツハツハツハッハッ！！」

突然、クツパの声が聞こえた。しかも、この声はマイクを通して上から言っているのがわかった。

「！屋上か！」

マリオはすぐに、地下に下りる階段の近くの二回に上る階段で屋上へ向かった。

二階を通って屋上に着いたマリオ。

（どこだ…？）

クツパの石像の隣の階段を上ったマリオは、周りを見るなり空を見るなりしてピーチ姫とクツパを探した。

「！あれは！」

空を見たマリオが見たのは、青空にある大きめの黒い物体…。

「クツパクラウン！ということは、あそこにクツパが！？」

マリオは、それがクツパがいつも乗っているクツパクラウンだと

すぐにわかった。

クッパクラウンは、クッパがいつも乗っている小型飛行船。見た目は、つばに小さいプロペラがついたもののように見え、一見は重たいものは運べないように見えるが、とても重いクッパを乗せることができるほど優れたもの。ちなみに、表面にはピエロのような顔がついている。

マリオに気づいたクッパはマイクを通してこう言った。

「まんまと騙されたなマリオ！！ワガハイたちはこれから結婚式場を探してくるのだ！！お前はそこで招待状が届くのを皆と一緒に待っているのだ！！」

そして、クッパはピーチ姫にマイクを向けた。そしてピーチ姫はマイクを通して、

「マリオー！！助けてー！！」

と、マリオに助けを求めた。

「くっ……！卑怯だぞ！！クッパ！！」

マリオはピーチ姫の助けを聞いた後、どうすればピーチ姫を助けられるかを考えた。

「ガーハッハッハッハッハッハ……！！！！」

「なっ……！！」

しかし、クッパはその間に笑いながら別の場所へ向かってしまった。それに気づいたマリオは思わず声を出し、

「待て！！クッパ！！」

クッパクラウンを追いかけた。だが、マリオは屋上の端で立ち止まった。ここから先は、走るだけでは進めない。

「まずい！このままじゃピーチ姫はクッパと結婚させられる！！」

マリオはその場で慌てた表情でそう言ったあと、ピーチ姫を助けるため、屋上から飛び降りようとした。

そのとき、

「?…なんだあれ?…流れ星?」

飛び降りようとしたマリオが見たのは、青空でもはっきりと見える白い流れ星のようなもの。しかし、それが何なのかはマリオにはよくわからない。

マリオは、その流れ星をしばらく見ていると、

「!?!」

嫌な予感がした。そして、マリオはその直後、

「ピーチ姫!!クッパ!!危ない!!!!」

マリオは慌ててピーチ姫とクッパに大声で危険を知らせた。だが、マリオとピーチ姫たちの距離はすごく遠い。ただの大声では届くはずがない。

そして、

カッ!!

マリオの嫌な予感が的中した。白い流れ星のようなものは、ピーチ姫たちに直撃した。

そして…、

ピーチ姫たちは…、

クッパクラウンとともに…、

森へと落ちていった…。

「……………」

マリオはその状況を見て、しばらく黙っていた。そして、

「ピーチ姫……………!!」

その場でピーチ姫の名を叫んだ。その後、屋上から地上へと飛び降り、すぐに森へと向かって走った。…ピーチ姫の無事を祈りながら。

（ピーチ姫…!どうか、ご無事で…!）

第5話 突然の悲劇（後書き）

キャラクター紹介

No.5

リンク

登場作品

ゼルダの伝説など

ハイラルの勇者。

かつて、ハイラルが魔王の手に落ちようとしたときに、聖なる剣『マスターソード』で魔王を封印した人物。

共に魔王を封印したハイラルの王女とはとても仲がいい。

剣術の他にも弓矢やブーメランなど、様々な武器を使いこなす。

今回は、ハイラルの王女の命令で、キノコ王国へ向かうことになる。

みなさん、どうでしたか？ピーチ姫…、心配ですね…。

次回はどうなるのでしょうか？

第6話 ピーチ姫はどこに？（前書き）

ピーチ姫とクッパはどうなってしまったのか。今回で分かる…かも
しれません。

第6話 ピーチ姫はどこに？

「…今のは一体、…何だったんだ？」

ここはとある地方の広い平原。ここでリンクは偶然、マリオが見た光景と同じものを見ていた。だが、リンクから見れば、白い流れ星のようなものが現れたかと思えば、突然光り、消えてしまったようにしか見えなかったが。

「…嫌な予感がする…。急ぐぞ！エポナ！」

「ヒヒーン！」

リンクはエポナとともに、急いで港へ向かった。

「はあ、はあ、はあ…。」

ここはキノコ王国のキノコ平野。マリオは、自分が見たものを出しながら森へと向かっていた。

（ピーチ姫が…。）

マリオの頭の中に映ったのは、突然現れた白い流れ星のようなものの。

（ピーチ姫とクッパが…。）

次に映ったのは、その流れ星のようなものがピーチ姫たちに直撃した場面。

（流れ星に当たって…。）

そして、そのままピーチ姫たちが森の中に落ちた場面が、マリオの頭の中に映った。

（早く二人を助けないと…。！）

クッパ城で何があったのかを思い出し終わると、マリオはそのまま急いで森へ向かった。

「この森の中だな。」

そして、少ししか時間をかけずに、マリオはピーチ姫たちが落ちた森の前に着いた。

この森は、キノコタウンから南へ歩くと五分で着く「キノコの森」。たくさんある木の中にたまにキノコが生えている。広さは、ピーチ城の半分ほどのである。

「早くピーチ姫たちを探さないと……！」

マリオは早速、森の中へ入って行った。

マリオは、森に入ってからたくさんの木と時々生えているキノコしか見ていない。

「うーん……。いないなあ……。」

マリオは、急ぎつつも慎重にピーチ姫を探していると、

「ピーチちゃー……ん……ん……！！！」

「……！！？」

突然の大声に驚いた。

「今の声は……、クッパ？」

そう思ったマリオは、すぐに声がした方へと向かった。

「確か、ここで声がしたような……。」

マリオは声がした方へたどり着いた。しばらく辺りを捜し歩き、曲がり角を曲がると、

「わ！」

「ん？」

そこにクッパがいた。その近くにクツパクラウンもある。マリオはいきなりクツパに会ったせいか、思わず声を上げた。クツパはその声に気づき後ろを振り向いた。

「マ、マリオ！お前、ピーチちゃんを捜しに着たのか！！？」

マリオを見ると、驚いて質問をする。

「ああ。ついでに、クツパも捜しに着たんだ。」

「え？ワガハイも？」

マリオが質問に答えると、意外な答えにクツパはキョトンとした。「ああ、流れ星みたいなものに直撃したんだからね。心配にならないほうがおかしいよ。でもよかった、クツパが無事で。」

マリオはそういい終えた後、笑顔をクツパに見せた。

「…、ガハハハハハハ！ワガハイは大丈夫なのだから、心配する必要はないのだ！！」

意外な答えにキョトンとした後、マリオのさらに意外な言葉にいつもの言い方で答えるクツパ。マリオも「アツハハハ…！」と楽しそうに笑った。そして、

「それで、クツパ。さっき大声で『ピーチちゃーん』ってピーチ姫を呼んでたよね。」

マリオは真剣に自分が聞きたいことにクツパに言った。

「ギクツ！」

クツパはその言葉に思わず声を上げた

「クツパ、ピーチ姫はお前のそばにいたんじゃないのか？」

マリオの質問にクツパはうつむいて答えた。

「…そうなのだ。気がいたらピーチちゃんがいなかったのだ。」

「やっぱり…」

予想通りの答えにマリオもうつむく。しかし、すぐに顔をあげこと言った。

「クツパ、詳しく話してくれないか？」

ここからは、クツパの話を元にした回想を解説しよう。

まずは、嬉しそうなクツパが嫌がるピーチ姫とともにクツパクラウンに乗っているシーンが映った。

「ワガハイはあの時、結婚式場を探しに行っただ…。だが…。」
次に映ったのは、流れ星のようなものがクツパたちに向かってくるシーン。ちなみに、クツパたちは後ろ向きだ。

「その時にあの流れ星がこっちに向かってきて…。」

今度は、流れ星のようなものに対して腕で目を隠し、目を強く閉じるシーンが映った。

「ワガハイは思わず目を閉じてしまったのだ。だが、その時クツパクラウンの操作を誤って…。」

最後に映ったのは森へと落ちていくクツパたちのシーン。

「そのままワガハイたちは森に落ちたのだ…。」

回想は終わり今へ戻る。

「気がついたらピーチちゃんがいなかったので、大声で叫びながらピーチちゃんを探した…というわけなのだ…。」

「そうだったのか…。」

（それが本当だったら、ピーチ姫は一体どこに？）

クツパの話が終わった後、マリオはピーチ姫の行方を考えた。

「わかった、搜してみるよ。」

マリオは、ピーチ姫を捜す気があふれている。

「クツパも捜すんだよね？ だったら先に見つけるよ！」

マリオはクツパにそう聞いてみると、

「…いや、ワガハイは帰るのだ。」

「…え？」

クツパの意外な答えに少し驚いた。

「ワガハイは宿命のライバルであるお前に恥ずかしい姿を見られたのだ。こんな形でピーチちゃんを見つけても嬉しくないのだ。だから、今日はこれくらいで勘弁してやるのだ。」

「あ、ああ……。」

クッパのピーチ姫を捜す気がない理由に、戸惑いながらも納得するマリオ。

「……では、サラバなのだ……！」

クッパはマリオに背を向けて走っていった。マリオはその光景と、クッパクラウンでクッパ城へ帰っていくクッパを見ていた。

「いつもだつたらどんなときでもピーチ姫を捜すのに……。……ま
さか！あいつも偽者……！」

マリオはそんな光景を見た後そう決め付けようとしたが、
「……ん？なんだこれ……。」

マリオは道端で何かを見つけた。

「！最新型の携帯電話！じゃあ、あれは本物のクッパか！」

マリオはそう言うのと、少し安心した。

その時、

「きゃああああ……！」

「！？な、何だ……！」

突然、悲鳴が聞こえ、マリオは驚いて声がる方向を振り向いた。
「今のは、女の子の声？フラワー広場の方から聞こえたな。」

マリオは、そう確信すると、

「急ごう……！」

すぐに声がる方へと向かった。

ここは、フラワー広場。森を抜けて南にある名前の通りいろいろな花が咲く広い花畑だ。

……早く解説ができる場所ではなかった。もし解説が長ければ、今の

雰囲気壊してしまう。

「あ…、ああ…」

この中央で白い僧侶服を着た一人の少女が、三体の魔物に襲われそうになっていた。敵は全てタコのような魔物で赤い色が二体、青い色が一体いる。だが、目つきは悪く、大きさもタコの三倍くらいだ。

ここで、一体の赤い色の魔物が少女にゆっくりと近づく。

「い、嫌…！誰か…、助けて…！」

しかし、少女はあまりの怖さにおびえて動けない。このままでは少女は危険な目にあってしまう！

その時、

「たあっ…！」

ドゴツ！

突然、少女の背後から男が飛んできて、少女に近づく魔物に飛び蹴りをお見舞いした。

そして、男は魔物を使って宙返りをし、少女の前で着地を決め、魔物は踏み潰された後、白い光に包まれ消えてしまった。

「え…？だ…、誰ですか…？」

何が起こったかわかっていない少女が見たのは、後姿だが、赤い帽子、赤い服、青いオーバーオール…。そう、マリオだ！

「…この人に手を出すな…！」

着地したままマリオは魔物に向かってそう言う。そして、マリオは魔物に顔を向け、戦う体勢に入った。

「僕が相手だ…！」

第6話 ピーチ姫はどこに？（後書き）

キャラクター紹介

No.6

キノじい

登場作品

スーパーマリオサンシャインなど

ピーチ城で暮らす老人。

ピーチ姫と同じく世界の平和を願っている。

普段は杖を使って移動しているが、ピーチ姫が大変なことになると杖を使うことを忘れるほど慌ててしまう。

キノコ族から見れば、とても偉い存在。

ピーチ姫はまだ行方が分からず…。一体どうしたのでしょうか…。次回も頑張ります！

第7話 謎の魔物と謎の少女（前書き）

マリオはこれから謎の魔物と対決！
ですが、まずはクッパのショートコントからです。

第7話 謎の魔物と謎の少女

ここはキノコ平野上空。そこには、クッパクラウンに乗ってクッパ城に帰る途中のクッパがいた。

(…………。)

この時クッパは、マリオの言葉を思い出していた。

でもよかった、クッパが無事で。

「…フン！次はワガハイがその言葉を言うのだ！」

クッパは、マリオの言葉を思い出した後、笑顔で新たな決意をし、そのままクッパ城へ帰っていった。

…はずだった。

「…?…何だか焦げ臭いのだ。」

もうすぐでクツパ城に着くところで、クツパは変なおいを感じた。そして、クツパはおいをたどって後ろを振り向くと…、

「…!ク、クツパクラウンから煙が…!」

なんと、クツパクラウンから煙が出ていた!

「ま、まさか…!森で不時着した時にクツパクラウンの一部が故障してしまったのか…!?!」

ボンツ…!

クツパがそう言っている間に煙が出ている所から音が響き、煙が大きくなった。

そして、クツパクラウンはバランスを崩し、

「のわ~~~~~!!!!」

クツパはクツパクラウンごとクツパ城に落ちた。

しかも、落ちる先には…、

「…!マズイのだ…!このままではワガハイの城のシンボル、クツ

パ像にヒビが入ってしまうのだ!!」

そう言った後、回避を試みたが、

「な、何!!?」

操縦が利かない。

どうやら操縦機能も壊れたようだ。

ヒューー…

「うあー…!!!!」

クッパクラウンはそのまま、クッパ像に向かって落ちていった。

ガン!!

ピシッ!ピシピシピシ…

バカン!

ドーン!ガラガラガラガラ…

クッパクラウンに激突されたクッパ像は、ヒビが深く入り、真つ二つに割れ地面に叩きつけられた後、更に細かく砕かれた。

クッパ像は、地面に叩きつけられたときにできた大きな煙の中に、クッパと共に消えていった。

その頃、フラワー広場ではマリオと謎の魔物の対決が始まろうとしていた。

マリオは、後ろにいる少女に声をかける

「君は危ないから下がってて。」

「は、はい！」

少女はマリオの言う通り、少し後ろへ下がった。

（花を燃やしたくないから、ファイアボールは使えない…。）

マリオはそう考えた後、目の前の魔物を見た。

（敵は赤いのと青いのそれぞれ一体…。でも、こんなタコみたいな魔物見たことない…。だけど…。）

マリオは、自分の攻撃を受け、消えていった魔物を思い出した。

（…倒せない魔物じゃない！）

マリオは先手を取るため、ダッシュで魔物に近づいた。だが、

プクー…

プクー…

魔物は突然、口の中を膨らませ、

ポン！
ポン！

「なっ！？」

マリオの顔に向けて、口から岩を吐いた！突然の攻撃にマリオは少し驚いた。

「！！！」

マリオが岩にぶつかりそうになった瞬間、少女は思わず声をあげそうになった。

「くっ！！！」

シャッ！

「え……？」

だが、マリオはその瞬間に飛んできた岩の下に、転がりながら回避した。少女は、今見たものが信じられないような顔で見ていた。それもそのはず、発射された岩は普通の人間では避けられないスピードだったのだ、それを避けられるのは彼女にとってすごいことなのだ。

そして、体勢を立て直してそのまま赤い魔物に向かった。

「はあああ！！！」

ドゴッ！

マリオは赤い魔物に回転蹴りをお見舞いした。
吹き飛ばされた赤い魔物はそのまま白い光に包まれ消えていった。

「まさか岩を吐くとはね。でも…。」

マリオは赤い魔物を倒した後、その場で青い魔物の方へ向け、

「これであと一体だ！」

そのまま攻撃に向かった。

「！！」

青い魔物は慌てて岩を吐こうとしたが、

「遅いぞ！」

マリオが先に青い魔物に近づいた。

「たああっ！！」

バキッ！！

マリオは青い魔物にアツパーを与えた。

空に浮かび上がった青い魔物は白い光に包まれ、消えていった。

「す…、すごい…！」

少女がそう言ってマリオを見ていた。

「よし！」

マリオは、そんな少女を背後にガッツポーズを取った。

戦いが終わり、フラワー広場で、

「あ、あの！あ、ありがとうございました！」

少女はマリオにお礼の言葉を言い、深く頭を下げた。

「どういたしまして。」

マリオはそれに笑顔で答えた。

（しかし、この国にはあんな魔物はいなかったはず…。一体なぜ…？）

マリオはうつむいて、魔物のことを不思議に思った。

「本当にありがとうございました！」

「え？い、いや…、もういいって。」

マリオが考え事をしていると、少女が再びお礼の言葉を言い、マリオはそれに照れながらも遠慮しがちに答えた。

（それにしてもかわいい女の子だなあ、同じ年ぐらいの男の子からすぐに告白されそう。）

マリオは少女の顔を見て、ふとそう思った。

少女は金髪のロングヘアーで、白い僧侶服を着ている。スカートの口と袖口、そして首の周りには太い輪のようなピンクの模様がある。正面からでは見えないが、白色のフードが金髪で隠れている。

首にはクリスタルの羽のペンダントを着けている。そして、前髪で額が隠れた小柄な顔はともかわいく、青空のような色の瞳が印象的だ。身長はマリオと同じだ。年齢はおそらく十六歳ぐらいだろう。ここで、マリオが話を変えた。

「ところで、この森でピンクのドレスを着た金髪のロングヘアーの女の人を見なかった？」

「え？……いえ、見ていません。」

「…そうか。」

マリオは少女の答えに残念な表情をした。そして、マリオは考え事をした。

（どうしよう…。ピーチ姫はおるか、手掛かりすらない…。すぐに搜したいけど、この女の子を置いていくわけにもいかないし…。）

マリオが悩んでいると、

「マリオさーん!!」

「？」

「!?!」

突然、誰かの声が聞こえたので、マリオと少女は声がする方へ顔を向けた。

そこにはつぶらな瞳がかわいらしい小柄なキノコ族の青年がマリオたちの方へ向かって走っている姿があった。

「キノピオ!」

マリオにキノピオと呼ばれた青年がマリオたちの元につくと、少し落ち着きがないままマリオに話しかけた。

キノピオについては次の機会に話そう。

「マリオさん！ここにいたんですね！すぐにピーチ城へ行ってください！」

「え？でも、ピーチ姫がまだ…。」

「ピーチ姫は僕の隊の隊員が探します！マリオさんは早くピーチ城へ！」

「？………わかった。すぐ行くよ。」

マリオは少し納得がいかないままキノピオの言う通りにすることにした。

（そうと決まったら、この子を町に送っていこう…ってあれ？）

マリオがそう思っただけで少女に声をかけようとした時、少女の様子がおかしいことに気づいた。

少女はキノピオを見て少し震えている。

「あれ？どちら様ですか？」

（どうしたんだ？…！まさか、キノピオを怖がってる！？）

キノピオのまだ少女の様子がわかっていない言い方に対し、悪い予感を感じたマリオは急いで少女に声をかける。

「いや、あの…、大丈夫！この子は…。」

「か、かわいい！」

「…え？」

マリオは少女の思わぬ答えにポカンとした

「撫でてもいいですか！？」

「とか言いながらもう撫でているじゃないですか！」

少女は目をキラキラさせ、頬を赤くしてキノピオの頭を撫でた。キノピオは困っているような少し嬉しいような表情をしていた。

「…まっ！キノピオを見て怖がる人はいるわけないか！」

マリオは考えすぎたことに恥ずかしさを覚えつつも、右手で頭をかきながらその光景を楽しそうに見ていた。

第7話 謎の魔物と謎の少女（後書き）

キャラクター紹介

No.7

キノピオ

登場作品

スーパーマリオブラザーズなど

ピーチ姫親衛隊の隊長。 時には住人として、時には兵士としてキノコタウンで暮らすキノコ族。

マリオに憧れており、マリオを目指して日々特訓し、その成果があつて今では隊長に昇進した。

キノコタウンに好きなキノコ族の女の子がいる。

いつか、マリオと共に冒険することが夢。

今回はおちが悪かったですね…。もつと精進します。

さて、ピーチ姫捜しは一旦中止。

マリオはピーチ城へ向かうことに…。

次回のはほんとなるかもしれません。

第8話 記憶がない少女（前書き）

前回はほのぼのとなるかも…とは言いましたが、これはほのぼのと
してるのでしょうか？

まあとにかく、第8話をどうぞお楽しみください！

第8話 記憶がない少女

「ところでキノピオ、僕に『城に行ってくれ。』って言っていたけど、城で何かあったの？」

ここは森からキノコタウンへと進む道。マリオは何も聞かされていないままピーチ城へと向かっている。

事情がわからないので、歩きながらキノピオに何があったのかを聞いてみるマリオ。

「それは、私もキノじいが『マリオ殿に話があるから呼びに行つてほしい。』…としか言われてなくていないんです。」

「え？そうなのか？」

キノピオはマリオの質問に対し、知っている限りのことを答えた。

「わかった、そのことは後にするよ。…それより…。」

マリオは城についてを後回しにすると決めた後、マリオたちの後をついて行く少女の方を見た。

「ごめんね。一緒にピーチ城へ来てもらうことになって。」

「い、いえ！元と言えば私が魔物に襲われたせいですので、気にしないでください！」

マリオは申し訳ないという気持ちで少女に謝る。少女はそれに対

し首を振りながら遠慮しがちに答えた。

少女はマリオに助けられた後、少女の身の安全を守るためにピーチ城へ向かうことになっている。これはマリオの考えだ。

「あ、そういえば自己紹介がまだだったね。僕はマリオ。この子はキノピオ。」

「え？…あ！キノピオです！よ…よろしくお願いします！」

突然、マリオは自分の右手を自分の方に向けて自己紹介をし、その手をキノピオに向けてキノピオを紹介した。キノピオはいきなりのことに慌てつつも、なんとか少女に向かって自己紹介し、頭を下げた。

「マリオさんにキノピオ君ですね。私は……………」

少女は二人の名前を確認した後、自己紹介をしようとしたが、急に黙り込んでしまった。

「……………私は……………」

「…？…どうしたの？」

マリオは、急に黙り込んでしまった少女を心配し、何があったのかを聞いた。

すると、少女は悲しい表情をしながら驚きの一言を言った。

「名前が…、思い出せません…。」

「……………え？……………ええ！！？」

少女の一言にマリオは驚きを隠せなかった。

「お、思い出せないって…ほ、本当なんですか！？」

「…はい…。」

キノピオも驚きを隠せない。少女はキノピオの言葉に悲しく答えた。

（まさか、記憶喪失か？…とりあえず他のことも聞いてみよう。）

マリオはそう考えた後、更に少女に質問した。

「じゃあ、出身地はどこ？」

「……………すみません、…わかりません…。」

「そうか…。じゃあ、誕生日は？」

「……………それもわかりません……………」

「…失礼だけど、年齢は？」

「……………わ、…わかりません……………」

マリオの誰もが答えられるような質問に対し、少女は「わからない」としか言えなかった。

「私は……………私は……………」

少女は自分が誰なのかが思い出せないことに悲しみを感じ、その場で両手で顔を隠しながらひざまずき、うつむいて泣いた。

「ちょ…、ちょっとマリオさん！なに女性を泣かせているんですか！」

「ええ！？そ、そんなつもりじゃ…！…えっと、ごめん！」

泣いている少女を見たキノピオは少し慌てながら、マリオに一言、注意するように言った。マリオも、少女が急に泣いたことと、キノピオに自分の意思とは違うことを言われたことに少し慌てつつも、少女に向かって謝った。

（でも、これは桁外れの記憶喪失だな…。一体何があったんだ…？）

この後、少女はなんとか泣き止み、気持ちを落ち着くことができた。マリオたちは再びピーチ城へと向かった。

「それで、あの人はどうなるんですか？」

「とりあえず、城に泊めさせてもらおう。僕が頼めば大丈夫だと思う。」

少女が落ち着いた後、マリオとキノピオは少女に聞こえないように話をした。

「わあ……。かわいい小人がたくさんいる……。」

「……やっぱりこうなっちゃうんだ……。」

キノコタウンに着くと、さっきまで泣いていたことが嘘だったかのように、少女はキノコ族を見て目をキラキラさせ、頬を赤くしていた。

マリオはその光景を苦笑しつつ、頭をかきながら見ていた。

キノピオも顔を赤くして、苦笑いで見ていた。

少女に見られているキノコ族はどういう表情をすればいいのかわからずに少女を見ていた。

「おーい、早く行こうよ。」

マリオは、山に叫ぶようなポーズで少女を呼んだ。

こんな調子で、マリオたちはキノコタウンを通り、ピーチ城に着いた。

ここはピーチ城の一階にある玉座の間。かわいらしくデザインされた壁や床、そして、床には赤い幅広く長いじゅうたんが入口から玉座までつながっている。

ピーチ城はキノコ王国を治めるピーチ姫とたくさんのキノコ族の兵士が住む、一階から四階まである大きくもかわいらしさがある城である。城の形は大きな土台に三つの塔が置いてあるような形をしており、左右には一つ、真ん中には二つのバルコニーがある。城の中には部屋がたくさんある。

ここで、マリオはキノじいから話を聞いていた。

「キノじい、キノピオから聞いたのですが、僕に何か用があるんですか？」

「ウヌ、用というのはすなあ。マリオ殿には明日、ある場所へ行ってほしいのです。」

マリオは早く知れたかった用について聞くと、キノじいは少しもったいぶらしつつ答えた。

「ある場所……どこですか？」

「それは……………」

マリオがさらに質問すると、しばらく沈黙が続いた。マリオはその沈黙に自然と緊張感が沸いた。そして、キノじいがその沈黙を破った。

「…明日までの秘密じゃ。」

「……………え？」

予想もしなかった答えにマリオはポカンとした。しかし、しばらくするとキノじいに反論した。

「……………ちよつ、ちよつと待ってください！なんでそこだけ隠すんですか！？」

「知りたければ、明日の昼頃に旅の準備をして、またここに来てくだされ。」

「……………いや、隠す理由を教えてくださいよ！」

「うーん…。まあ、あれです。隠しておけば城に行く楽しみが増え

るというやつですぞ。」

「そんな楽しみいりませんよ!」

「まあとにかく、今日は家に帰って明日また来てくだされ。」

「ええ……。」

マリオは何度もツッコむように反論したが、キノじいは笑顔のままなかなか肝心なところを教えてくれない。

「…では、ピーチ姫の件はどうするんですか?」

「ピーチ姫は我々が捜しますからご安心くだされ。」

「……わかりました。」

マリオは反論を諦め、納得がいかないまま明日またピーチ城へ行くことを決めた。

「それと、一つお願いがあるんです。」

「?…何ですか?」

「この子を、しばらくこの城に泊めさせてもらえないでしょうか?」

マリオがそう言って手を指し出した先には、頬を赤くして目をキラキラさせてキノじいを見ている少女がいた。

ちなみに少女の隣にはキノピオがおり、マリオもキノピオも少女

の今の顔にまだ気づいていない。気づいているのは、少女のことを全く知らないキノじいだけだった。

「ああ…、すみませぬ。今この城はピーチ姫がさらわれてからドタバタしてしましてのう、人を泊めさせる暇がないのです。」

「え！？そんな…。どうしよう…。」

マリオはキノじいの答えを聞いた後、少女をどうするかを考えた。

(…あ！)

キノピオが少女をチラツと見てみると、少女が何を考えているのかが顔を見てわかった。

「ダメですよ！あの人はとても偉いんですから、間違っても撫でないでください！」

(へ？)

「え？そうなの？…わかった。」

キノピオは少女にキノじいについてを教えた。少女はキノピオの言ったことを笑顔で理解し、少し残念に思いつつもキノじいを撫でないようにしようと決めた。

だが、これは二人からすればヒソヒソ話だが、キノじいはその話がはつきりと聞こえた。

その時、キノじいの考えが変わった。

「あ、あの…。やはり…」

「では、キノじい。僕たちはこれで失礼します。」

「へ…？ウ…ウヌ。」

キノじいが何か言おうとしたが、考え事が終わったマリオが話を切り上げた。キノじいとはっさのことに短い一言しか言えなかった。

「それじゃあ、行こう。」

「はい。」

「あ、私が送ります！」

というような話をしながら、三人は玉座の間を後にした。

「……ワシは、産まれて始めて、今の地位の辛さを知りましたぞ…」

三人がいなくなった後、キノじいはその場で涙を流しながら手とひざを床につけた。

第8話 記憶がない少女（後書き）

キャラクター紹介

No.8

謎の少女

登場作品

オリジナル

マリオがピーチ姫を捜しに森へ行ったときに出会った謎の少女。
ほとんどの記憶を失っており名前すら覚えていない。

この少女が、この物語の鍵となるかもしれない。

次回は、謎の少女について少しわかるかもしれません。
よろしければ、感想をお願いします！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3061w/>

スマッシュブラザーズ 光と闇と伝説の英雄 キノコ王国編

2011年11月27日20時51分発行